

## 後志支部活動報告

### だれでもできる、無理なく続けられる 体育科の授業づくり

#### 1. 活動方針

ようやく今年度から研究団体の一つとして活動を始めることができた。後志では、体育を主として勉強したり専科を持ったりしている教員がいる一方、体育の授業に苦手意識を持つ教員も多い。

本会としては、体育科を担う教員の専門性を高めることも重要なテーマであるが、だれもが総じて質の高い体育授業を行うことができるようになることも大きなテーマとしてとらえている。そこで、体育授業を行う上でおさえるべき知識や指導技術を交流・普及することはもとより、安全かつ効果的な授業を行うための様々なポイントや教師が持つべき視点やこどものとらえ方など、授業づくりに係る様々な情報を発信し、広く普及させることで、体育に対する負担感を軽減し、どの学校・どの学級でも日常的に質の高い授業を続けていくことができる未来を目指していきたい。

#### 2. 研究および活動の視点

【視点①】 どの子にも「できた!」がある授業

##### ■UDの視点から見た授業改善

- ・教師の明確な指示・発問
- ・上達をうながす練習方法や場の設定
- ・単元全体のデザインや目標・課題設定

##### ■対話から生まれる気づきと技能の向上

- ・課題解決に向けた身体感覚の共有
- ・チーム内での役割意識や互いを生かす動きの共有

##### ■ICT活用による視覚化

- ・問題場面・課題把握の明確化、焦点化
- ・自力解決や対話の切り口

【視点②】 小中9年間をつなげる指導と評価

##### ■目指す子どもの姿の明確化と具体化

- ・発達段階に応じた目標設定とゴールの姿を見据えた指導
- ・子どもの姿をもとに同じ視点での評価

#### 3. 活動報告

##### ■第1回体育授業研究会

授業者 宮川 脩平 教諭 (仁木町立仁木中学校)

日時 11月22日(金)5校時

生徒 1学年 17名

領域 器械運動「跳び箱運動」

本時の学習課題

『はねる感覚を身につけよう』

(台上前転から首はね跳びへ)



【映像資料の効果的な活用】



【段階的な場の設定】



〔自発的な対話から技の感覚を共有〕

#### 【成果】

(ICT)模範演技を2画面同時再生で比較するなど、技のポイントや本時の課題を分かりやすく提示できた。

(ICT)遅延再生アプリを使い、自分の演技をすぐに確認する場を設けていたことで、主体的に技術向上に取り組めるよう促していた。

(場)ステージの高低差やマット跳び箱等を有効に活用し、段階的に練習に取り組める場を設定していた。

#### 【課題】

(UD)踏み切り位置、手をつく位置など、より細かな部分を示すと迷いなく取り組めた子がいたのではないかな。

(対話)首はね跳びの動き方が分かり、課題を解決できた生徒を活用し、生徒同士で技の感覚やポイントを伝え合う場面を意図的に設定すべきだった。

(対話)生徒同士の話し合いを円滑に進めるために、単元を通して共通の用語や技を見る視点を示すことが必要。

(系統)9年間の発達段階を考慮し、身につけさせたい資質・能力を分かりやすく細分化し、より系統的に指導を進めたい。

## 4. 次年度に向けて

### ■組織と活動の拡大

- ・11月末現在 14名
- ・若手教員を中心にネットワークを拡大中

### ■授業研究

- ・『指導上の困り感』が多い領域での提案授業を提供する
- ・気軽に無理なく、互いの授業を見合い、日常実践に生かす

### ■情報の発信・活動の普及

- ・電子メール等による情報提供  
(広域性をカバーする手立てとして)